



東洋英和女学院

史料室だより No.97

2021.11.6 発行
東洋英和女学院
史料室委員会



✿ 音楽を楽しむ東洋英和の宣教師たち（1930年代 旧木造校舎にて）

「Just to show the end of the drawing room where the piano stands. Sadie Tait is striking the pose of soloist.」と説明のあるこの写真は、旧木造校舎が取り壊される前に記念として客間で撮影されたものでしょうか。宣教師のミス・テートが独唱者のポーズを取り、ミス・ハミルトンがピアノを弾いています。「史料室だより」ではNo.97とNo.98の2号にわたって宣教師に始まる東洋英和各部での音楽教育の歴史を紹介していきます。

✿ 目次

特集 東洋英和の音楽教育①	
中学部・高等部の音楽教育 —伝統に連なる—	津屋 式子 …… 2
〈資料紹介〉39 中高部の音楽関係資料 —富岡正男先生の遺された楽譜など130点—	…………… 6
特集 東洋英和の音楽教育②	
東洋英和幼稚園の音楽教育	
—リズム活動と創造活動としての音楽について—	菅原 陽子／堤 加壽美 …… 8
〈東洋英和の先生がた〉7 今村 寿々代先生	
文芸会の立役者 —「清らかな大きな童女」—	…………… 12
利用統計／史料室の活動より（2021年4月～2021年9月）	…………… 14



中学部・高等部の音楽教育 —伝統に連なる—

津屋 式子



創立120周年記念音楽会（2004年7月16日、東京オペラシティコンサートホール）

恵まれた音楽環境

中学部・高等部の6年間は、とにかく音楽に溢れていた。同様の感想を持つ卒業生も多いだろう。毎朝の礼拝では、即興演奏を交えたオルガンが鳴り響き、讃美歌を歌うときは誰ともなしにアルト・パートなどを歌うので、豊かなハーモニーが自然と聞こえてくる。クリスマスに歌うヘンデルの「メサイア」合唱曲や、高等部卒業式で歌うロッシーニの合唱曲「信仰・希望・愛」は、マーガレット・クレイグ記念講堂（大講堂）に全クラスが集まって練習が行われる。¹あるいは合唱コンクール、野尻でのキャンプソング。人によってはこれに聖歌隊、音楽部、ハンドベル部などの宗教・クラブ活動や、ピアノ科、オルガン科、またオーケストラの楽器のほかヴィオラ・ダ・ガンバも学べる器楽科など、任意の課外教室への参加経験も加わるだろう。自身は参加してなくても、楓祭や、クリスマスや周年行事としての音楽会などで、それらの存在を知る。音楽活動は生徒にとどまらない。時折、響きのよい階段の踊り場などで、先生方によるリコーダー、チェロ、オルガンなどの合奏が行われ、その音色に誘われて生徒たちが集まっていく様子は、美しい日常風景として筆者が特に記憶しているものだ。これらはすべて、通

常の音楽の授業とは別に行われていた。

卒業後にこうした経験を誰かに語ると、「なんと豊かな音楽経験でしょう」「そんな学校は世界中探しても、なかなかありませんよ」と、驚きと羨望をもって受け止められる。そうしてようやく、自分がいかに恵まれた音楽教育環境にあったかを、改めて知ることになるのだ。

河野和雄先生

筆者の個人的な思い出を少し書くことをお許しいただきたい。小学部も歌をよく歌い、音楽に満ちた環境だったが、通りを隔ててすぐ近くの中高の校舎に足を踏み入れると、そこにはまったく新しい音楽世界があった。中学生としてのまさに初日、大講堂での入学式の礼拝で受けた衝撃を、今も忘れることはない。オルガン演奏をされていたのは、ほかでもない河野和雄（こうの・かずお）先生だった。当時はオルガンのことなど何も知らない13歳の筆者が、その演奏に触れるなり、雷に打たれたように音楽に魅了され、気がつけば先生を職員室に訪ねて、弟子入りを志願していた。ならばオーディションを、ということになったのだが、明らかにピアノの実力が足りなかった筆者への回答は、「もう少しピアノを

学んでから出直すように」。しかし一日も早くオルガンを習いたかった筆者は、厳しいピアノ指導者につくから、とオルガンへの「本気度」をアピールして再度弟子入りを嘆願し、なんとか入門を許していただいた。

その初学者にも一切妥協なしの充実した個人レッスンもさることながら、毎朝の礼拝で聴く河野先生の奏楽は、なによりの学びの機会だった。即興とも思われる神秘的な前奏で心を鎮めて祈りに導かれ、華やかな退堂曲で元気に送り出される。おなじみの会衆讃美歌にも、対位法的な前奏やデスカントⁱⁱが加えられ、一節ごとに主旋律を奏でる声部が替わり(例えば主旋律を足鍵盤で弾くなど)、さまざまな和声で彩られる。いずれも非常に高度な技術だが、オルガニストは本来このように礼拝奏楽をすべきなのだと思われた筆者は、一音も聴き逃すまいと耳を凝らしていた。

教会音楽を専門的に学ばれた河野先生による、日々の礼拝奏楽、音楽の授業、合唱指導、ハンドベル部の指導ⁱⁱⁱ、昼休みのオルガン演奏。ある年には、クリスマス時期のコンサートで歌う曲として、17世紀ドイツのリューベックという作曲家の合唱曲を選び、古いドイツ語の発音や文法を、音楽の授業で丁寧に説明してくださったり、筆者を含む数人にヴァイオリンやオルガンでの器楽部分を任せ、手書きの譜面を準備してくださったりもした。その八面六臂の先生の姿に筆者は、18世紀ドイツのカントル^{iv}(教会音楽監督)のイメージを重ねていた。

器楽の充実

さて本稿の準備にあたっては、筆者が在学中に見聞きした以外のことも知りたいと、河野和雄先生に取材させていただいた。紙幅の関係で全ては書ききれないが、そのお話をもとに、先生の東洋英和での音楽教育活動の一部をもう少し紹介しよう。

1972年から2005年まで33年間、中高部音楽科教諭として教鞭を執り、以後も学院オルガニストとして2018年まで奉職した河野和雄先生は、東京藝術大学および同大学院修了後、ドイツのウェストファーレン州立教会音楽学校に2年間留学。帰国後ほどなく東洋英和の中高部音楽新任教師募集に応じた。合唱教育に特に注力された富岡正男先生^vが前任者だったことから、「後任には、器楽が専門の人材を」という考えが、当時の学校側にあったようだ。

その求めに十二分に適う活躍は既述の通りだが、先生は意識して器楽の充実を心がけたという。東京都の助成なども活用して楽器の購入を進め、鉄琴、

木琴、コントラバス、ティンパニ、ギターを揃え、オルフの音楽劇「クリスマス物語」を中学1年恒例の「タブロー」に代えて行ったり、リコーダーやヴィオラ・ダ・ガンバを複数本揃えてシュッツの「クリスマス物語」を音楽劇として行ったりした。また高2選択音楽ではメノッティのオペラ「アマールと夜の訪問者」を保護者や小学部の児童を招き上演したこともあった。この中ではオーボエ2本が指定されていたが、経験者は1人。もう1本は音色の似たピアノカで代用するなどの工夫をしたという。



高2音楽選択者によるオペラ「アマールと夜の訪問者」発表後の出演者と河野和雄先生(2001年12月13日)

音楽の筆記試験では、校歌の文学的表現や文語調の歌詞、また「東の道(ことば)」の意味を問うものや、ある曲の断片から何の曲かを当てる問題などが出題され、その独特な設問に試験中の教室がどよめく場面もあったが、これも「生徒に楽譜を読めるようになってほしかった」との思いから考案したものだったようだ。こうしたさまざまな創意工夫や新しい試みについて、先生は「ただ、やりたいことを自由にやらせてもらっただけ。ほかの先生方が大目に見てくれた。生徒に力があって、無茶に付き合ってくれた」とどこまでも控えめだが、先生のおかげで、母校での楽しい音楽経験を今も記憶している卒業生は多いことだろう。

大講堂のオルガン

ところで前述のように筆者自身も魅了された先生のオルガン演奏は、1997年の大講堂へのパイプオルガン設置以前は、ヤマハF1という機種の子機電子オルガンで行われていた。電子楽器にもかかわらず、先生の高い演奏技術と音楽性に触れ、オルガンの魅力に開眼する生徒は絶えなかった。筆者の在学中、オルガンの個人指導は「オルガン同好会」の名のもとに、きわめて小規模に行われていたが、パイプオルガンが入ってからは、「ピアノ科」に並ぶ「オル

ガン科」に発展し、より多くの希望者が指導を受け、音楽大学のオルガン科に進学する者も増えた。そのパイプオルガンの選定から設置までの詳細については、河野先生ご自身のテキストが「史料室だより」No.50、51に掲載されており、東洋英和の中高部に、そして大講堂の空間にふさわしいオルガンをもたらすために、先生がいかに腐心されたかが分かる。1994年には10か月間、再び欧州に留学し、かつての留学先で教会音楽家としての研鑽をさらに積む傍ら、各地のオルガン工房を見て回り、パイプオルガン選定の下調べに多くの時間を割いたそうだ。



パイプオルガン奉獻式・記念演奏（1997年6月14日、新マーガレット・クレイグ記念講堂）での河野和雄先生

オルガン・コンサートとさまざまな音楽会

河野先生が着任翌年の1973年から始めた「オルガン・メディテーション・タイム」は、ドイツの教



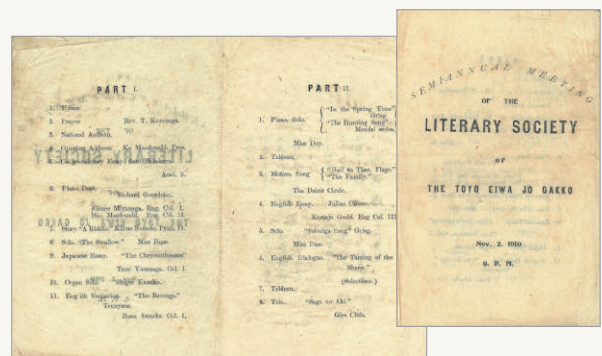
第1回オルガン・メディテーション・タイムのプログラム（1973年6月22日）題字は宣教師ミス・ヘザリントンによるもの。

会がよく開催する無料のコンサートに着想を得たもので、毎週金曜日の昼休みに大講堂でオルガン独奏を行った。初期には毎回、オルガンの挿絵入りプログラムを手作りしたという。このコンサートでは、17世紀のオランダ・ドイツの曲からフランスのロマン派、さらに現代曲までさまざまなオルガン曲が演奏された。やがて、生徒によるオルガン演奏、在校生や卒業生による声楽や器楽のアンサンブル、高3音楽選択者による発表会などと内容が多様化し、「アフタヌーン・コンサート」という名に変わって今日まで続いている。その間に、創立100周年、111周年、120周年など節目の大規模な記念音楽会が、校外の会場で挙行され、在校生や卒業生、教師らの手によって華々しく成功したのも、こうした日常の小さく丁寧な音楽会の積み重ねがあったからこそではないだろうか。

音楽会の伝統

このように、個人指導をも含む手厚い音楽教育、それを発表する音楽会の実施に、河野和雄先生が創意工夫をもって貢献されたことは、史料室に保管されているコンサートのプログラムなどからもよく分かる。そしてさらに古いプログラム史料に目を向けると、そうした音楽教育が、東洋英和のごく初期から脈々と続いてきた伝統であることが見えてくる。

東洋英和では、早くも創立2年後の1886年から、3人の宣教師らによるピアノとオルガンのレッスンが開始され、希望する者は授業料を払えば個人指導を受けることができた。今に続く「ピアノ科」の始まりである。そして、ごく初期から学内には、研鑽の成果を発表する場があった。それは当初「文学会」(The Meeting of the Literary Society)と呼ばれ^{vi}、1928年以降は「文芸会」へと展開した。いずれも、生徒によるピアノ独奏や連弾、歌や器楽などの演奏と並び、日英語の詩歌・文学の朗読や、ダイアログ（当時の日本語プログラムでは「対話」



1910年11月2日の文学会のプログラム英語ページ。ピアノ科、タブロー、ダイアログなどと書かれている。

と訳された)、タブロー(同「活人画」といった文学・演劇的演目が必ず含まれていた^{vii}。『アンのかご』著者の村岡恵理氏(1986年高等部卒)によると、村岡花子が『赤毛のアン』に見た世界には、東洋英和で花子自身が経験したものとそっくりの、こうした会の様子が描かれていたという^{viii}。文学会のような催しはおそらく、19世紀後半のカナダで広く行われていたものだろう。東洋英和に赴任したカナダ人宣教師らは、故郷で慣れ親しんでいたこの催しを、日本の学校教育の場で再現したのだ。明治維新から日も浅く、西洋音楽に触れる機会自体が極めて少なかった当時の我が国において、東洋英和では同時代のカナダと同様に、西洋音楽の演奏と英語の朗読の催しが行われていたことに驚かされる。

伝統に連なる

草創期からミス・ハミルトンの時代まで、カナダ人宣教師らによる積極的な音楽教育により、東洋英和では、北米大陸を経由した西洋音楽と音楽教育を直に学ぶことができた。戦後、日本人の音楽教師が活躍する時代となり、富岡先生によって合唱音楽が強化された後に、今度は河野先生が、ドイツを中心とする欧州大陸の教会音楽、オルガン、さまざまな器楽の音楽をもたらし、東洋英和の音楽環境はさらに多様で豊かなものになった。これらのどの時代に在学した英和生も、音楽に溢れた幸せな日々を送ることができただろう。そこに貫かれているのは、キリスト教教育、全人教育の一環として、音楽を極めて重要なものとする精神だったはずである。そして歴代の優れた音楽教師らによる創意工夫が、その精神に形を与えてきた。さまざまに創出された音楽の機会に触れた生徒の中から、音楽の道に進んだ者も少なからずいる^{ix}。あるいは筆者のように、たとえ音楽の専門家にならなくても、東洋英和の中高での濃厚な音楽体験により、音楽を深く愛する心を育まれ、音楽とともにある喜びに満ちた人生を与えられ

た者は数多いことだろう。それが学院の草創期からの伝統に基づくものだと知るとき、この歴史に連なる方々への感謝の念に堪えないのである。

〈註〉

ⁱ 2クラスないし4クラス合同で行われる合唱練習の時間は「合音」(合同音楽の略)と呼ばれ、クリスマスや周年記念音楽会、卒業礼拝などの行事で演奏される音楽が準備された。

ⁱⁱ 主旋律より高音域につけられる対旋律。

ⁱⁱⁱ ハンドベル部は1979年創設。河野先生によると、名古屋の金城学院で1970年に日本にハンドベルを導入し指導していたアメリカ人宣教師ケリー氏から昼休みに電話があり、「ベル、やりませんか」と勧められたのがきっかけだったという。

^{iv} ヨハン・ゼバスティアン・バッハがライプツィヒの聖トーマス教会で27年間勤めていた職。教会音楽監督として聖歌隊の指導、指揮、オルガン演奏、礼拝のための音楽の作曲などすべてを担い、かつ教会の聖歌隊に所属する子供たちの学校の教師でもあった。同時にバッハは街の音楽愛好団体コレギウム・ムジクムを指揮して、定期的にコーヒーハウスで公開コンサートを行った。

^v 富岡正男先生は1952年4月～1972年3月、中高部音楽教諭として東洋英和に在職。数多くの宗教合唱曲を女声合唱に編曲した。女声3部のためのメサイア合唱曲集、ロシーニの合唱三部作「信仰」「希望」「愛」なども富岡先生による編曲。作曲では、多くのミュージカル作品が現在の音楽部の伝統の礎となったほか、「トミソング」と呼ばれる数多のキャンプソングには今も熱烈なファンが多い。今号の別稿「資料紹介」39(6-7頁)も参照されたい。

^{vi} ややこしいのだが、「文学会」(The Literary Society)という機関が企画する催しが「文学会」(The Meeting of the Literary Society)と呼ばれていた。

^{vii} 音楽と並ぶ文学会のもう一つの要素である文学・演劇は、その後、英語、音楽、演劇まで多才な今村寿々代先生(1895-1947)という稀有な存在によって、創造的に引き継がれていった。詳細は今号の別稿「東洋英和の先生がた」7(12-13頁)を参照されたい。

^{viii} 文学会に類似した催しの記述は、『赤毛のアン』第24章で「音楽会」(村岡花子訳。英語原題では「Miss Stacy and Her Pupils Get Up a Concert」)として登場する。

^{ix} 1970年～2021年の音楽大学進学実績では、東京藝大、武蔵野音大、国立音大など主要音大を含む音楽大学、総合大学の音楽専攻、音楽専門学校におよそ160人が進学している。(中高部進路指導主任 諸澤珠実教諭、史料室調べ)



〈執筆者プロフィール〉津屋 式子 (つや・しきこ)

1973年東洋英和女学院小学部入学、85年高等部卒業。93年慶應義塾大学文学研究科修士課程修了(英語学)、読売新聞東京本社入社。教育事業、美術展、音楽会、ダンス公演などの制作に携わる。2020年より調査研究本部で国際、政治経済、科学、医療、学術などのセミナー事業を担当。89年に大学派遣で米国ブラウン大学に、2009年に企業派遣でロンドンのサザビーズ・インスティテュート・オブ・アーツに留学。東洋英和中高部在学中より河野和雄先生にオルガンを師事、キリスト教音楽学校(現・キリスト教音楽院)オルガン科修了。今も週末は趣味でオルガン、チェンバロ、声楽を学んでいる。



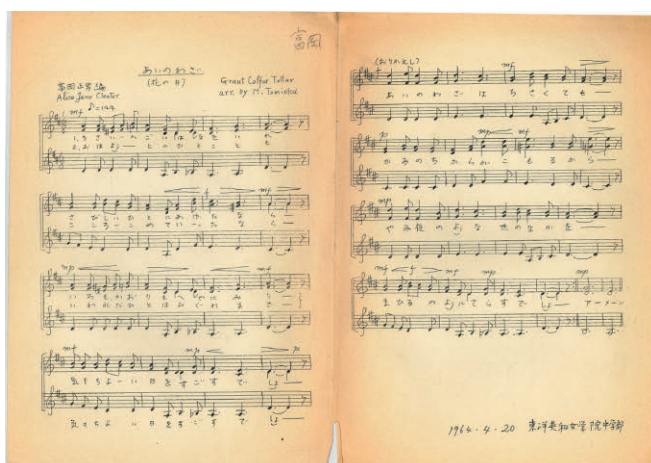
〈資料紹介〉39 中高部の音楽関係資料

—富岡正男先生の遺された楽譜など130点—

東洋英和の音楽教育において類まれな働きをなされた富岡正男先生は1952～1972年に中高部音楽科教諭として勤務されました。在任中の資料の多くは数年前に史料室へ移管され整理・保管されてきましたが、今号を機に内容をあらため目録化を試みました。130点に及ぶ資料のごく一部を紹介します。

*文中ではお名前の漢字を正式表記の「富岡」で統一しました（除く引用部分）。在職中は「富岡」が使われていました。

保存箱名【富岡正男先生の遺された楽譜など 1. 宗教曲】30×34.5×5cm（内部は作り付けファイル）
 ・2012年6月 中高部音楽科研究室→史料室に移管 ・採録点数—54点（一部、複数資料をまとめて1点として採録）
 長野彌先生（元院長、理事長）から「東洋英和で宗教音楽を教えてほしい」と声がかかり着任して以来、富岡先生は多くの宗教曲や讃美歌などを英和生のために編曲・作曲しました。聖書の目次（書名）を覚えるための歌や、聖書科教諭の依頼により作られた「十二弟子」は、キリスト教教育と音楽が結びついた作品です。

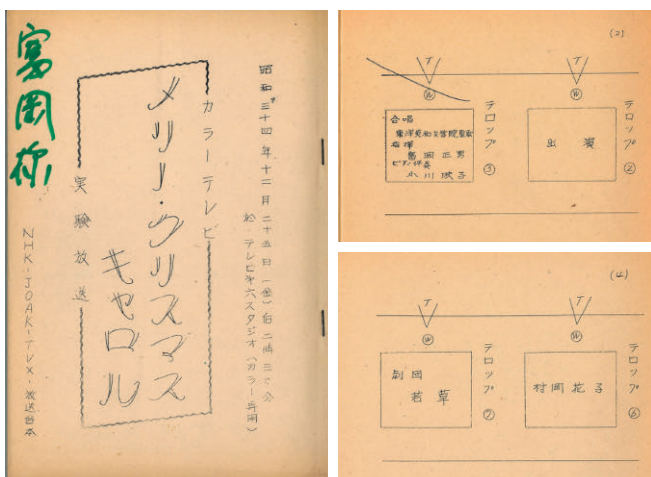


整理番号	箱1-1
標 題	「あいのわざ（花の日）」楽譜（プリント）
年 代	1964年4月20日
形 態	バラ
備 考	「1964.4.20 東洋英和女学院中部」編曲・詞 富岡正男。原曲は曲 Grant Colfax Tullar、詞 Alice Jean Cleator。1967年発行 讃美歌第二編 26番「ちいさなごに」の編集委員会訳とは訳詞が異なっている。上部中央左に「富岡」鉛筆で記名あり

（左）整理番号 箱1-1

保存箱名【富岡正男先生の遺された楽譜など 2. クリスマス関係】箱の形態は1と同じ

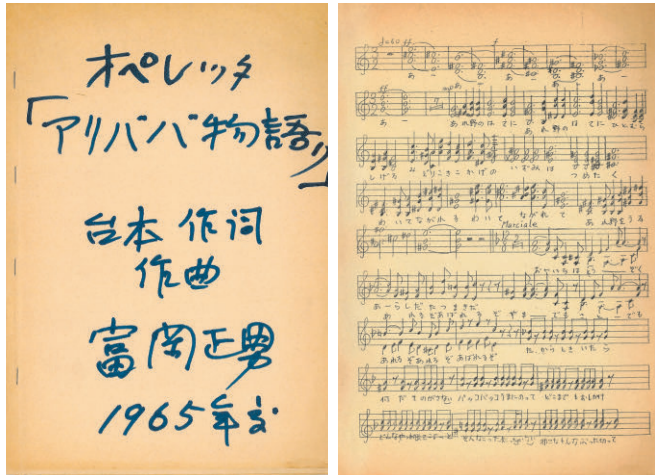
・2012年6月 中高部音楽科研究室→史料室に移管 ・採録点数—24点（一部、複数資料をまとめて1点として採録）
 就任初年度だった1952年の、富岡先生編曲によるメサイアの1曲が含まれたクリスマス礼拝のプログラムや、他にも富岡先生がタブローの作曲・台詞を手がけるなどで関わられたクリスマス曲の楽譜や台本が数多く残されています。



整理番号	箱2-4
標 題	「メリー・クリスマス キャロル」台本
年 代	1959年12月25日
形 態	綴
備 考	カラーテレビ実験放送 NHK-JOAK-TVX-放送 台本。昭和34年12月25日（金）后2時30分 於 テレビ第六スタジオ（カラー専用）。村岡花子（お話）、東洋英和女学院聖歌隊（合唱）が出演。緑マーカーで「富岡様」記入あり

（左）整理番号 箱2-4（表紙、テロップ進行表 p.2とp.4）

保存箱名【富岡正男先生の遺された楽譜など 3. 東洋英和の音楽部オペレッタなど】箱の形態は1と同じ
 ・2012年6月 中高部音楽科研究室→史料室に移管 ・採録点数—26点（一部、複数資料をまとめて1点として採録）
 富岡先生が指導なさった校友会音楽部（後に音楽クラブ）では、オリジナル台本によるオペレッタの発表が活動の中心でした。「白雪姫」「アリババ物語」「七夕物語」などは複数回再演され、その都度編曲や台本の見直しがされています。他に「体操の為の音楽」（作曲 富岡正男、体操の振付 佐々木孝男）や「東洋英和女学院 追悼の歌」（1955年10月1日 追悼記念日礼拝のため）のような学校生活に根差した曲も残されています。



整理番号	箱3-18
標 題	オペレッタ「アリババ物語」台本
年 代	1965年度
形 態	綴
備 考	1. 楽譜。表紙に「オペレッタ「アリババ物語」」台本 作詞 作曲 富岡正男 1965年度 青サインペンで記入あり 2. 台詞台本。表紙に「一九六五年度 オペレッタ「アリババ物語」」作詞曲 富岡正男」青サインペンで記入あり。ペン書きの部員一覧挟込み。創立81周年記念祭で上演

(左) 整理番号 箱3-18 (楽譜表紙、p.1)

保存箱名【富岡正男先生の遺された楽譜・台本など】39×40×31cmの箱に封筒や紙袋で分類
 ① 富岡正男先生の遺された楽譜など 4 トミンソング他（中性紙封筒に保管）
 ・2012年6月 中高部音楽科研究室→史料室に移管 ・採録点数—11点（一部、複数資料をまとめて採録）
 ② 楽譜 富岡正男先生が池田守男理事長・院長にさしあげたもの（封筒に保管）
 ・2013年10月 院長室→史料室に移管 ・採録点数—5点
 2007年「阿川佐和子と野尻を語る会」で池田先生に贈った、献辞入り「メサイア女声合唱曲集」楽譜など
 ③ そのほか富岡正男先生時代の楽譜、台本など
 ・2014年9月 中高部音楽科研究室→史料室に移管 ・採録点数—8点（一部、複数資料をまとめて採録）
 2014年の移管資料は、オペレッタの台本や楽譜が一まとまりになったものが多く、今後再演もできそうです。



(上) 箱大③-2 (合唱・伴奏譜表紙、表紙裏、p.1~p.2)

整理番号	箱大③-2
標 題	「決定版 ハミルトン先生を送る歌」
年 代	1956年5月31日
形 態	冊子、バラ
備 考	関根文之助 詞、富岡正男 曲。自筆楽譜（合唱・伴奏譜「女声三部合唱 リードオルガン・ピアノ・伴奏 1956・5・31 東洋英和女学院」、オルガン譜、メロディー譜、ペン書き）、歌詞（裏に関根先生へ、ハミルトン先生の送別音楽会について通信文あり、ペン書き）、生徒配布用楽譜1部

(右)「森は生きている」台本・楽譜一式など、数多くの資料が残されている。



今後この資料群を引き続き検証していくことは、富岡正男先生の音楽を解き明かし、東洋英和の音楽教育を更に深く理解するために欠かすことができません。富岡先生在任当時に在学の方、音楽部に属していた方など、各活動について詳細をご存じでしたら、ぜひ史料室までご連絡をお願いいたします。資料をご覧いただくことも可能です。

東洋英和幼稚園の音楽教育 —リズム活動と創造活動としての音楽について—

菅原陽子（幼稚園教諭）／堤加壽美（幼稚園園長）

東洋英和幼稚園は2021年に創立107周年を迎えます。どんなに社会が変化しても神さまを信頼し、一人ひとりの子どもを尊重し、創造性を育むことを大切にしたいと努めてきたことを様々な史料から読み取ることができます。

この特集では、現在に至るまで東洋英和幼稚園の音楽教育に影響を与えている「宣教師によるリズム活動」と1970年代から始まった「Music Making」の実践とその研究活動を取り上げたいと思います。

1. 宣教師ミス・レーマンによるリズム活動

ミス・レーマンは1922年アメリカ国籍の宣教師として初来日して秋田や静岡で幼稚園に奉職し、1929年には日本初のナースリー・スクールを創始するなど、東洋英和着任に先立ち、保育界で既に活躍していました。（『カナダ婦人宣教師物語』改訂版89頁）

東洋英和幼稚園はカナダ人宣教師によって創設されましたが、幼児教育の専門家としての期待からアメリカ人宣教師のミス・レーマンが招聘されました。ミス・レーマンは1934年に東洋英和女学校幼稚園師範科の主任に就任し、幼稚園の保育にも深く携わりました。

1937-1938年の保育記録にはミス・レーマンのリズム活動について次のような記述があります。

〈1937年12月8日（水曜日）〉

ミス・レーマン 湯浅〔治子〕先生指導のクリスマスのリズム たのしさうに子供がして居た。

〈1937年12月21日（火曜日）〉

礼拝、そしてリズムのけいこ。ミス・レーマンがピアニストだ。

〈1938年5月31日（火曜日）〉

ミス・レーマンが模範教授としてリズムを指導される！

また、1934年から1942年まで東洋英和幼稚園の教諭であった長野静江先生（後に短期大学保育科教授、柿の木坂幼稚園副園長）は、ミス・レーマンのリズム活動についてこのように回想されています。

ミス・レーマンの時にはよく礼拝をしました。椅子を丸くおいて坐り礼拝をしてから、歌ったり、お話を聞いたり、リズムをしたりということを一日に必ずどの時間かに行いました。その司会は福島〔壽美江〕先生と私の二人でしました。（中略）ミス・レーマンはまめな先生でよく幼稚園にいらっしゃいました。（中略）まずいらっしゃるとピースの楽譜



東鳥居坂町二番地に幼稚園があった頃の園舎ホールでの保育風景（1932年）



ミス・レーマン（Lois A. Lehman）

をピアノの上に沢山置いて、私が司会をしているのをちゃんと聞いていらっしやる。私が「今日はお天気ですね」といいますとさっと楽譜を見てお天気の曲の何かを出そうとなさる。「今日はお庭でどういことがあって」とか、「お池に何があって」というとすぐ曲をお探しになる。それでこちらも今度何を言いましょうか、ミス・レーマンは何を出すかしらと緊張するのです。そして私が「それではここで遊びましょう」と言うのと、スキップか、歩くのか、駆けるのかっていう顔をして私をみていらっしやるから、「それじゃあ、今日はスキップにしましょうか」といいますとすぐスキップの曲を弾いて下さるんです。そんなですから司会はとても緊張しました。（「史料室だより」No.17）

ミス・レーマンの音楽リズムに、子ども達が生き生きとした反応を見せたことから、当時の保育者達も一生懸命にその音楽リズムを習得していったことが想像できます。

保育記録など、様々な史料からミス・レーマンが東洋英和幼稚園のリズム活動に影響を与えたことが推測されますが、ミス・レーマンはどのような保育観を持っていたのでしょうか。ミス・レーマンは「幼稚園の教科は只の子守ではなく、子供の宗教教育、健康社会教育、知育すべてのことに心をくばって、一年間の保育計画をたてることから教えられました。そしてそれは先生達が頭で考えるのではなくて、子供達を良く観察して、子供達の自由あそびの中から、子供の興味のあるもの、その求めているもの、子供にあたえなければならないものをみつけ計画し、それと統一した一ヶ月教科を考え又、一週間のカリキュラムを組むことを教えられました。毎日毎日の子供達のあそびを通し明日の教科をみつけそれを一週間のカリキュラムとむすびつける生きた保育をすることを求められました。神を敬い、為すことによって学ぶ、実学を大切にさいました。」（岡本わか『東光 創立九十周年』1974年、17頁）

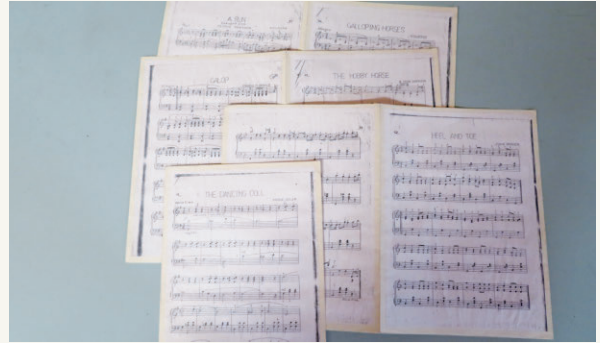
ミス・レーマンはリズム活動においてもその時の子どもの状態に即してピアノの弾き方を変える等の実践を保育者に伝えました。

また、ミス・レーマンの人柄や音楽教育についてこのような記述もあります。「ミス・レーマンは明るくキビキビした行動的な人柄で、保育者になろうとする若い学生たちに人のあり方、仕事をする者としての生き方を教えた。彼女は「Toyo Eiwa Training School」という歌を作詞・作曲し、ピアノを弾い

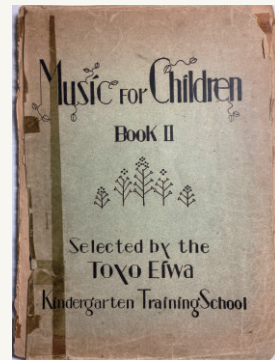
て学生たちにことあるごとに歌わせた。」（小林恵子『日本の幼児保育につくした宣教師「下巻」』キリスト教新聞社、2009年、485頁）

2. 宣教師のピアノリズム曲

宣教師によってもたらされたピアノのリズム曲の楽譜は、その後冊子になり、東洋英和女学院の保育者養成の音楽教育と東洋英和幼稚園の保育で、今日まで変遷を重ねつつも受け継がれています（大学保育子ども学科では2017年度まで使用）。〈画像参照〉



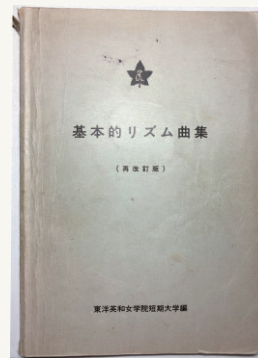
英語タイトル、手書きのリズム楽譜。初期のものと思われる（幼稚園所蔵）



左写真『Music For Children Book II』第2版（幼稚園所蔵）



右写真『やさしい基本的リズム曲集』鎌倉千楨先生・スクルトン先生編集のもの（昭和29年）初版、（幼稚園所蔵）



左写真『基本的リズム曲集』東洋英和女学院短期大学編（昭和56年）第4版 再改訂版、（幼稚園所蔵）



右写真『やさしい基本的リズム曲集』東洋英和女学院大学保育子ども学科編集（2010年）準復刻版、（幼稚園所蔵）

宣教師の音楽リズムは東洋英和の保育の特性としても捉えられており、東洋英和女学院大学人間科学部保育子ども学科名誉教授の飯島千雍子先生は、宣教師から伝わった曲集及びリズム活動についてこのように語られています。

この曲集に含まれる曲の数々は教会幼稚園の生活の中で宣教師が伝えた音楽、そして音楽リズムである。リズム曲の一曲一曲にはメモが付いていて、あるものは歌いながら動くように指示されている。ことばを感じて、またリズムの曲から弾き手が弾き手ならメッセージが伝わる。ことばと身体とが一つであるような音楽。勿論、楽譜を見る人が見れば、伝えるべきものを理解できるだろう。不安があるとすれば、宣教師たちが伝えようとしたものは実体があるもの、楽譜に内包されているとはいえ、その音楽的体験、ピアノに合わせて歩いたり跳んだり、駆けたり、揺れたり活動に意味があること、そのことを受けとめることができただろうかということ。宣教師の残したメモから想像するに、その活動の愉しさ、意味、目的を教師がよく知っていることがわかる。私が考えていたよりもずっと教師としての役割を認識していた専門家であったと思う。『カナダ・メソジスト教会婦人宣教師が拓いた東洋英和女学院の保育・保育者養成の特性の検証Ⅲ』（2012）7-8頁）

当時の保育者達は、伝道者であり教師であった宣教師のキリスト教の子ども観、保育の姿勢、音楽リズムの感性から影響を受け、東洋英和幼稚園の保育の礎を築いていきました。

3. 創造活動の一環としての音楽教育へ

その後の東洋英和幼稚園の音楽教育に大きな影響を与えたものとして1970年頃の「Music Making—創造活動の一環として—」の取り組みを挙げることができます。この取り組みのきっかけは、東洋英和女学院大学名誉教授（当時は短期大学助教授）芝恭子先生が、短大の音楽リズムの授業でこのMusic Makingを学生と取り組まれ、この活動を東洋英和幼稚園の子ども達と共有されたことによります。

芝先生はこの活動をこのように定義されています。Music Makingとは「一人一人が全神経を集中してその環境を見、聞き、感じることを通し、環境の中にあるさまざまなリズムやムードを伴った音を、音楽を用いて一連の流れを持つ音楽に変えて再生を試みる、創造的表現活動です。」そしてこのMusic

Makingの目的を「個人がその全存在をかけて、各々の内面や外界を自分自身で認識する態度を養うことであり、続いてその認識を表現に移すための、何ものにも強制されることのない自発的な動機と、既存の形式や方法に縛られることのない自由な思考能力を養うことです。」（『幼児の教育』69号、1970年、29-30頁）と著されています。

このような主意の下、5歳児クラスの子ども達と保育者が幼稚園で経験した事柄を音と身体で表現した活動の記録が残っています。

子ども達は、はじめに話し合い、乗り物、キャンプ、夏、秋、動物の5グループに分かれ、それぞれが音を探し、聞きあい、イメージをまとめていきます。そして水笛・鈴・大太鼓などの既製楽器と、箱の中に実を入れたり、ビニールの中に砂と枯れ葉を入れたりした手作り楽器の音、保育者の語り、子どもの歌、身体的リズム活動を組み合わせていきました。それは真に音を創り出す活動となったのでした。



幼稚園ホール内にある楽器コーナーにて（1970年代）

このMusic Makingの活動を通して学んだことを当時の保育者はこのように記しています。

（中略）彼らの中には、創造的な活動をすれば、思いきりのびのびと自分を表現し、そのことによって精一杯の力を出すものを持っているのだということ、発見できたこと。また、教師が協力することによって、お互いが深くかかわり、子どもたちにも個々に深くかかわり、心の交わりができ、子ども同士もひとりびひとり仲間を大切に思いやる心が、いっそう深くなったことである。（『キリスト教保育』1974年11月、12頁）

この取り組みは1974年日本保育学会第27回大会において「Music Making—創造活動の一環として—」

という題で研究発表され、Music Makingの理論を保育の現場の中で実践したユニークな取り組みとして倉橋賞を受賞しました。

この後もこの音楽活動は日常の保育の中で引き継がれ、12年後1986年に再び学会で2つのテーマを発表しました。

「子どもの感性の発見—創造的生活の中で—（その1）Music Makingその後」では、子どもたちが「晴れの日」や「春」の音を教育用楽器、民族楽器、手作り楽器で表現しており、保育者はこの活動の中で「子どもの感性」に注目し、このように考察しています。

音づくりの活動は、特に子どもの感性によって創造できる音楽活動ではないかと考えられる。これらの事を通して考えられる事は、現在の子供達は感覚が鈍いと言われているけれども、感動する時を与え、物に対する関心を高め、まわりの環境によって感覚を刺激する事により、感性は生まれるのではないだろうか。そして感性を育てる事は、幼児期にとって大切な活動の一つであると考えられる。音をつくる事によって子どもの感性を発見したが、これは音楽活動のみでなく、他の分野でも十分にその事がいえるのではないかとと思われる。そして、他の分野の中でも宗教的な活動は、特に関係が深いものと思われる。（日本保育学会大会研究論文集（39）1986年、67頁）

「子どもの感性の発見—創造的生活の中で—（その2）宗教活動とのつながり」のテーマでは、子ども達がキリスト降誕の話の中の博士が砂漠を旅する音と星の音をイメージし、金管、木魚、鈴、マラカスなどの楽器を選び、音の強弱やリズム、楽器の入れるタイミングを仲間と相談しながら表現した取り組みについて発表しました。

この活動を子ども達と体験した保育者は反省と課題としてこのように記しています。

子どもの感性は想像し創造をする。宗教的な活動のなかの宗教体験はこれからの時代にますます問われ、必要なものになってくるのではないだろうか。（中略）現場の保育者が、もっと子どもの活動のさまざまな側面で感性を発見し、これを育てることはある意味で一番大切なことで急務なのではないか。それには子ども達をまず信頼すること。そして深く理解し自由な解放感のなかで子ども達の人格そ

のものを見つけることに力をそそがなければならないのではないかを、今までの生活を通して反省させられそのことに努力しなければと思った。（日本保育学会大会研究論文集（39）1986年、69頁）

4. 結びとして

音楽活動は自然な活動として現在も子ども達の生活と遊びの中にあります。保育者の計画で日時を決めて音楽リズムの活動をする時もありますが、いちよの葉が風に吹かれてたくさん舞い、歓声をあげて喜ぶ子どもの姿が見られた後、保育者のピアノの伴奏と共に身体や楽器で感じるままに葉が舞う様子を表現して楽しむこともあります。

このように子どもが自然や生活から様々な体験をすることで、実感を伴った表現が身体や言葉、音などを通して生まれていきます。



ピアノの音を聞いて思い思いに表現する（2019年）

今号の特集では、東洋英和幼稚園の音楽活動に今日に至るまで影響を与えていると推測される「宣教師のリズム活動」と「Music Making」を取り上げました。107年の歴史の中では、子どもを取り巻く環境も制度も変化していますが、神から愛されている子ども一人ひとりを尊重し、毎日の生活や遊びの中で育つ感性や心を自由に動かした活動を行うことを大切にしたいと努めていることは、それぞれの時代においても同じであったことを確認することができました。

東洋英和幼稚園の音楽（宣教師のリズム曲の写譜や保育記録等）の史料をお持ちの方は史料室までご連絡ください。

E-Mail : archive@toyoeiwa.ac.jp

TEL : 03-3583-3166

FAX : 03-3583-3329

〈東洋英和の先生がた〉 7 今村 寿々代 先生

文芸会の立役者

—「清らかな大きな童女」—



「皆さん！ 私はお芝居の先生です」

「何しろあんな波瀾万丈ないわね」「ほんとに珍しい面白い人だった」と回想されているのは今村（山田）寿々代先生である。『東洋英和女学校五十年史』（以下『五十年史』と略す）の職員一覧を見ると、東洋英和女学校への就任は1921（大正10）年、担当教科は英語と音楽となっている。しかし、今村先生が教えたのはそれらの教科だけではなかった。

卒業生で女優になった賀原夏子氏（本名 塚原初子。1938年高女科卒）は小学科に入学してすぐに「いともふくよかな、いともこやかな先生」がお見えになり、「皆さん！ 私はお芝居の先生です」と自己紹介したことに驚いたという。当然、学校の教科に「お芝居」は無い。今村先生は、今度「ピヨコ太郎」というお芝居をやるので、1年生にも参加してほしいと言い、今でいうところのオーディション方式で挙手を促したという。誰よりも早くさっと手を挙げた賀原氏はその他大勢のカエル役で出演。豪華キャスト（主役のピヨコ太郎はのちにタカラジェンヌ桜町公子となる千野幸子氏）による大ドラマミュージカル作品だったという「ピヨコ太郎」での初舞台の面白さと、今村先生との出会いが女優賀原夏子誕生につながったのではないかと新井 竹先生（1920年高女科卒）は語っている。

山梨英和女学校時代の同僚は村岡花子

今村先生の旧姓は山田で、1895年生まれ、山梨英和女学校卒業後、東京に出てきて東洋英和女学校の高等科に進学し、学生でありながら下級生に勉強を教える「半先生」でもあった。卒業後は母校の山梨英和女学校に着任し、英語と音楽と体育を教えた。

今村先生と山梨英和で教員同士として過ごしたのが翻訳家・児童文学者の村岡花子氏（旧姓 安中。1913年高等科卒）である。山梨英和女学校の同窓会誌には、学校の30周年記念音楽会で二人が一緒

に合唱をした記録も残されている。結婚後、今村先生は東京に住み東洋英和女学校に勤めるようになる。

英和の舞台活動の伝統「文学会」「文芸会」

東洋英和では、音楽教育と並んで舞台芸術系の活動も熱心に行われているというのが、いつの時代にも共通する印象ではないだろうか。現在でも中高部「楓祭」におけるステージ系（音楽部や英語劇部、ダンス部など）演目の完成度は高く、観客も熱い。

歴史をさかのぼると、東洋英和では開校初期から生徒が役員「文学会（Literary Society）」が企画する「文学会」という催しが寄宿生に限って行われていた。「文学会」というのは、英国やアメリカのカレッジやハイスクールで行われていた学生・生徒の課外活動としての「文学会」を模したものと考えられ、他のキリスト教系の学校でも行われていた。「文学会」では、音楽演奏・合唱・英語暗誦・日本語または英語劇・活人画（扮装した人が背景の前にじっと立ち、画中の人物のように見せる出し物）などが上演され、熱心な活動が展開された。

その後、1928年に東洋英和に「校友会」（生徒と教員が会員の課外活動統括組織）が発足すると、修養部、体育部、文芸部が設置され、従来の「文学会」は文芸部が企画する「文芸会」「学芸会」に変わっていく。校友会の各部長は教員が担当し、今村先生は文芸部の第3代部長となった。『五十年史』掲載の1934年までの文芸部の活動記録には、今村先生の音楽指導の記録、今村先生作・演出の聖劇「殉教者ステパノ」「生贄」、ページェント「四季の恵」「母の姿」などの作品名が列挙されており、当時いかにさかんに今村先生指導の舞台活動が行われていたかが分かる。それらの聖劇に出演し、のちに教員となった岡本幸江先生（1936年高女科卒）は「情報も娯楽も少ない時代ではあり、文芸会は学校生活の大きな行事であり楽しみであった」と語り、在学中

は聖劇部で活躍し、のちに女性ジャーナリストの草分けとなった三枝佐枝子氏（1938年高女科卒）は「自分が芝居好きになったのには、（中略）今村寿々代先生の影響が大きかった」と振り返っている。美声の持ち主で、英語も音楽も教えられ、英語の劇や歌劇も作れば、軽妙かつ鋭い視点からの文章をものにする今村先生は、生徒たちに強い印象を残した。

50周年に至るまでの数々の大文芸会を導く

1929年と1930年に開かれた「大文芸会」の目的は「本校改築資金募集」であり、本格的な劇場である青山会館や日本青年館で開催された。大歌舞伎公演なみの入場料であったらしいが保護者も卒業生も快く券を買ってくれたという。『五十年史』によると「非常に盛大、（中略）宗教学校の催らしく、清純な香高きものであつたとは、多くの校外の人々の寄せられし称讃の言葉であつた」という。1930年の会の売り上げは約二千元に及び、純益はすべて建築資金に寄付されたという。この時も、歌唱指導に脚本演出、衣装・小道具の指示出しに至る大車輪の活躍をしたのが今村先生だった。

そして、ヴォーリス設計による新校舎完成後、1934年の創立50周年記念文芸会で上演された今村先生作のページェント「想ひ出」は、ミス・カートメルに始まる英和の歴史を劇で振り返る試みだった。2回上演され、11月7日には卒業生の東伏見宮大妃殿下も臨席し、祝賀行事は大盛況だった。校舎改築資金募集にはじまり創立記念式の大文芸会まで、今村先生は一番自身の才能を発揮できる、絶好の時期に東洋英和に奉職していたのだった。

教師を辞めてアメリカへ演劇研究に

しかしその後、戦争に突入していく時局のためか学校での劇の上演は少しずつ少なくなり、遂には消えてしまい、今村先生も英語だけを教えるようになっていったという。そして教師よりも役者や演出家に向いていた…と言われていた今村先生は、演劇に夢中で家庭を顧みなかったため山田姓に戻り、1935年には東洋英和を退職し、YWCAのミス・カフマン奨学金により渡米、宗教劇や音楽をシアトルやワシントンで学び、帰国後はYWCAで演劇指導を行っていたという。東洋英和のYWCAに自作の台本を提供したり、幼稚園師範科で談話・劇の指導



小学科で上演された「ドンブラコ」（1928年）。右手後ろが今村寿々代先生、中央の主役の桃太郎は山東初子氏

をしていたことが資料から辿れるが、その後の先生の活動についてはよく分かっていない。

先生は1947年に永眠される。山東初子氏（1936年高女科卒）による追悼文には、今村先生の像は「清らかな大きな童女」のようであり、「美しい夢を持たれ御自分の中から新しい物を生み出し大きな前進をめざして歩まれた方。あのほとぼしるようなエネルギー、あふれる善意。企画の新鮮さを思う時、然も私達より前の時代に生まれた方だけになお心を打つ物がある」と記されている。まさに「忘れ得ぬ先生」であったという。

松本 郁子（史料室）

今村 寿々代（いまむら・すずよ）先生

— 略 歴 —

1895年11月10日	誕生
1913年3月	山梨英和女学校卒業
4月	東洋英和女学校高等科入学
1916年3月	同 邦語科卒業
1918年3月	同 英語科卒業
4月	山梨英和女学校に着任
1920年7月	同 退職
1921年4月	東洋英和女学校に着任（英語・音楽担当）
1928年～	授業を受持つ一方で、ハミルトン校長の秘書を担当
1932年～1934年	東洋英和女学校校友会文芸部の第3代部長を担当
1935年3月	東洋英和女学校退職
5月	YWCAカフマン奨学金によりアメリカで宗教劇研究および視察、帰国後YWCAで演技指導を行う
1947年2月15日	永眠（享年51歳）

利用統計 (2021年4月～2021年9月)

		4月	5月	6月	7月	8月	9月
展示見学者数		—	—	—	—	—	—
展示見学者区分	学内関係者	—	—	—	—	—	—
	一般	—	—	—	—	—	—
新型コロナウイルス感染防止のため展示コーナーは休業							
資料閲覧者数 (累計)		2	0	8	3	5	4
閲覧者区分	本学学生・生徒			2			1
	現教職員	1		1	3	2	
	旧教職員					1	
	同窓生・学院関係者	1		5		1	
	同窓生(研究者)						1
	他校研究者・学生						2
利用の目的	年史編集						
	著述・論文作成	1			2	4	3
	伝記資料調査				1	1	1
	記録類の調査・研究			2			
	学院広報関係			2			
	その他	1		4			
	資料の種類 (重複あり)	2		7	2	4	2
	東洋英和関係						2
	カナダの教会関係						2
	村岡花子関係					1	1
	周辺地域史			1	1		
	その他						
月別レファレンス件数		11	16	17	9	6	15
質問者の区分	本学学生・生徒						
	現教職員		3	5	5	3	3
	旧教職員			2			
	同窓生・学院関係者	3	2	6		2	1
	同窓生(研究者)						1
	外部研究者・学生	3	8	2			9
	外部研究機関	2	1	2	1	1	
	一般	3	2		3		1
質問内容 (重複あり)	資料所蔵調査	5	8	9	5	3	6
	写真所蔵調査	4	5	4	1	1	1
	事項調査	7	12	9	7	4	15
	その他		1	2			

史料室の活動より (2021年4月～2021年9月)

(☆は複数回)

2021年4月

- ☆『野尻キャンプサイト50周年記念誌』制作のため、関係者からの資料・画像収集、野尻関連資料や写真の分類・整理、取材、歴史・年表・施設の変遷ページのため調査、執筆、編集、校正、進行管理補佐
- ☆『野尻キャンプサイト50周年記念誌』編集会議 (第11回～20回まで参加、校正合わせ等作業)
- ☆執筆/編集/校正—「史料室だより」No.96
- ☆コロナ関連の各部のおもな資料をファイリング
- ☆校正—『港区教育史』(平成までについての新版)のうち東洋英和各部に関する記述を各部担当者と連携し校正
- ・照会—京都新聞より、ヘレン・ケラー来日の際に通訳した村岡花子の記録音源について
- ☆140周年刊行資料に向けた年表データ作成。各年史、逐次刊行物等を参考に採録作業 (酒井・谷川)
- ・校正—大学フレッシュマンセミナー「自校史」リモート講義用データ
- ☆校正—大学卒業アルバム沿革ページ
- ・照会/資料提供—外部研究者。村岡花子関連資料
- ・照会—山梨英和学院史料室より、画像の年代について
- ☆来室/調査—中高部母の会役員。今年度の母の会義援金グッズ作成にあたり、ヴォーリズについて

- ・2019年カナダ桜プロジェクトツアー画像のデータベース入力のための準備
- ・校正—大学史資料協議会HP機関紹介ページ
- ・照会—山梨英和学院史料室より、村岡花子 (安中はな)の卒業式の日時について→1913年3月31日
- ・「楓園」93号の特集記事編集会議に陪席 (松本)
- ・照会—海外研究者より、同窓会会報などについて
- ☆来室/調査—幼稚園園長と菅原陽子先生。「史料室だより」特集執筆のため「保育日誌」等の音楽教育関連資料を数回にわたり調査
- ・25日 東京都に緊急事態宣言発出 (～6月20日まで)

2021年5月

- ☆照会—学外研究者より、宣教師マーサ・カニンハム、マーガレット・アームストロング、ジョージ・カックラン、デヴィッドソン・マクドナルドについて→東洋英和の宣教師資料、WMSの書籍などを紹介
- ・「史料室だより」No.96 発行、発送
- ・照会—2016年度の「村岡花子と広岡浅子」展について→関連資料を送付
- ・鳥居坂教会 野村稔牧師より、史料室提供の画像を使った教会動画をご送信いただく
- ・照会—山形政昭先生より、野尻湖周辺のヴォーリズ建築

の有無について→東洋英和関連では特にヴォーリズ設計の建造物があったとの記録は無し

- ・大学副学長より2022年度「東洋英和の歴史」授業について、講義を2回史料室担当で行ってほしいという要請あり→法人事務局で検討のち受諾
- ・来室／調査—中高部教員。中高部の過去の卒業礼拝資料
- ☆2021年度村岡花子記念講座について、村岡家、生涯学習センター、学長室、史料室で検討
- ・大学史資料協議会東日本部会総会オンライン参加

2021年6月

☆「史料室だより」No.97音楽特集のため各年史、逐次刊行物などから音楽関連の記録を抽出。音楽関連資料整理、各種音楽関連リスト作りなど

☆照会—額田記念東邦大学資料室より、高良とみについて→戦前に東洋英和の師範科で教える

- ・1日 第1回史料室委員会 対面とオンラインで開催
- ☆中高部地下倉庫改修にあたり、夏休みに移動が必要な歴史資料（大型什器含む）を中高部、総務課、二幸産業と実地に確認、一時保管先を相談

- ・『野尻キャンプサイト50周年記念誌』→校了
- ☆来室／調査—小学部母の会の役員。学校周辺の歴史、ヴォーリズ校舎、昔の小学部写真についてなど
- ・120年史編纂がどのように行われたかのヒアリング結果をまとめる→140周年刊行資料編纂の参考とする

☆資料整理 逐次刊行物の格納、書架の整理（スペース作り）、重複資料の廃棄など

- ・来室／調査—本学学生2名、年史などの資料を調査
- ・カナダの出版社Nimbus主催のBook Launch (*Anne's Cradle*) をYouTubeで視聴(村岡恵理氏、平野キャシー氏が『アンのゆりかご』英訳について語る)
- ・今後の140周年刊行資料編纂について、山本香織史料室委員会委員長と水谷悟先生(元中高部社会科教諭。静岡文化芸術大学准教授)と打合せ

☆照会—旧教職員より、短大英文科で修養会の講師を高見澤潤子氏に依頼した年について→大学図書館も協力、1982年の卒業カンファレンスで講師を務めていた

- ☆来室—中高部教育実習生に史料室を案内
- ・照会—小学部教員より、ヴォーリズ校舎における小学校の子どもたちの食事場所について→キャフェテリアで小学生と女学生は入れ替わりで食事していた
- ・打ち合わせ—法人事務局長、総務部長と今後の140周年刊行資料編纂について
- ・照会—山梨英和学院史料室より、田中清子(旧姓 向山)、今村寿々代(旧姓 山田)について→『50年史』『史料室だより』『楓』などの該当箇所をお知らせする

2021年7月

- ・1日『野尻キャンプサイト50周年記念誌』刊行
- ・来室／調査—中高部教員、戦時中の生徒の生活がわかる資料について→「史料室だより」No.75、76、中里昭子氏の記録集などを紹介
- ・照会—甲府和田平町自治会会長より、村岡花子が旧和田平町出身と随筆に描いてあるが、どこの番地であるか？→山梨英和学院史料室より、番地まではわからず
- ・照会—朝日新聞自史事務局中村謙氏より、甲府時代に渡辺充氏(外交官、平成天皇侍従長を歴任)がハミルトン先生に英語を習っていたため甲府時代の画像が欲しい→山梨英和学院史料室より提供あり

☆校正—小学部「ぎんなんだより」100号歴史ページ

- ・校正—楓美会2022年度用カレンダー掲載事項

- ・12日 東京都に緊急事態宣言発出(～9月30日)
- ・14日「史料室だより」音楽特集のため河野和雄先生に取材。津屋式子氏進行、陪席：村岡恵理氏、三原麻里氏
- ・17日 キリスト教学校教育同盟事務職員オンライン夏期学校参加(松本・三笠)
- ・常務理事会にて増淵稔理事長・院長より『野尻キャンプサイト50周年記念誌』刊行の意義と野尻の野外教育の必要性についてコメントあり
- ・調査—「文学会」の起源について、トロント公共図書館の梶原由佳氏より関連書籍、カナダでの類似の催しなどについてご教示いただく
- ・東京都公文書館所蔵の東洋英和関連資料のリストアップ
- ・研修—立教大学共生社会研究センターと京都大学文書館共催のオンラインセミナー「大学におけるレコードキーピング—シドニー大学の挑戦—」オンライン参加(松本・三笠)

2021年8月

☆調査—「ぎんなんだより」100号校正に伴い、恵風学校・永坂孤女院についてファイル再編、再調査

☆調査／執筆／編集—「史料室だより」No.97

- ・来室／調査—津屋式子氏。「史料室だより」No.97 音楽特集執筆のため、各種音楽資料を調査

☆校正—2021年度村岡花子記念講座チラシ文面

- ・地下2階書庫調湿機の保守点検(1年に1度の定期点検)
- ・中高部地下倉庫から一時移動した歴史資料を倉庫に戻す
- ・校正—大学学生手帳2022年度版のうち年表など
- ・来校—景観模型工房盛口正昭氏。7月に貸出いただいた「アン・オブ・グリーンゲイブルズ」の模型を返却
- ・来室／調査—村岡花子で自由研究をする大森在住の小学生親子に資料紹介、質問に対応
- ・照会—高等部長より、メモリアルチャペルの十字架について。旧校舎で十字架が掛かっていた写真があるかどうか→現時点で史料室には画像無し

2021年9月

- ・*Anne's Cradle* (『アンのゆりかご』英訳本) 納品(学院創立135周年、大学開学30周年記念に翻訳助成)
- ・照会—学外研究者より、井上敬子(旧姓 吉田、井上円了夫人)について→関連資料を紹介
- ・照会—海外研究者より、戦前の教員の在籍と担当教科、人物名の漢字の読み方確認など
- ・15日 第2回 史料室委員会 オンラインで開催
- ・照会—エロイーズ・カニングハム宣教師の在籍期間について→臨時招聘教師として1928年に在籍
- ・照会—中高部社会科教員より、長崎で活動した商人グラバーと英和との関係は？→長男の倉場富三郎の妻ワカが初期の東洋英和の卒業生
- ・執筆—『日本歴史』『文書館・史料館めぐり』コラム

【おもな移管資料】

- ・小学部より、聖歌隊や特別礼拝録音カセットテープ、宗教部関連のビデオテープ
- ・中高部音楽科研究室より、河野和雄先生時代の資料一式
- ・幼稚園より、2011年幼稚園写真アルバム11冊、スライドアルバム2冊、80周年記念品ほか
- ・中高部より、昼食用パン注文販売(通称「おじパン」)に使われていた木箱(中学部・高等部)2箱

【おもな受贈資料】

- ・中高部より、野尻キャンプ50回記念Tシャツ
- ・幼稚園母の会作成卒業アルバム(1996年度～2001年度)、幼稚園・中高部関連紙焼き写真など

- ・寺澤東彦元小学部長より「小学部だより」1998年7月号～2002年3月号
- ・日本ピアノ教育連盟より、井上二葉氏（1948年高女科卒、ピアニスト）紹介HP動画DVD（作成に画像提供）
- ・元短大教授（故）伊藤之雄先生資料一式、元短大講師榎木伸明先生記事
- ・1967年 高等部卒業アルバム
- ・野尻「ローイング・ボート 基礎クラス修了証」
- ・フェルト製「東洋英和」ワッペン（軟式テニス部の試合の際に体操着の左下に安全ピンで付けて使用）
- ・三代にわたる同窓生より、勤労働員関連資料、在学中の小学部～中高部の書類、生徒会活動資料ほか多数

（書籍・雑誌・論文）

- ・山内晴子氏（1962年高等部卒）より、『渋沢研究』第33号、2021年（山内晴子氏「朝河貫一と角田柳作：文化的国際主義者」所収）
- ・『五味秀夫作品集』（五味秀夫氏は元中高部・短期大学美術教員）
- ・中村早苗氏（1980年短大卒）より、『キリスト教教育論集』第29号、2021年3月（中村早苗氏「東京の私立小学校における学童集団疎開の実態—東洋永和女学校附属初等学校を事例として—」所収、資料提供で協力）
- ・鳥飼玖美子氏（1964年高等部卒）より、自著『通訳者たちの見た戦後史—一月面着陸から大学入試まで—』新潮社、2021年ほか、著作合計8冊
- ・山梨英和学院史料室深沢美恵子氏より、自著『花子とアン 村岡花子の甲府時代』教文館、2021年
- ・松岡裕子氏（1957年高等部卒）より、『松岡裕子 26枚の絵』グリーン・メドー、2021年
- ・山川篤行氏より、山川國益氏『夕暮れ—山川國益著作集—』自費出版、1996年
- ・富坂キリスト教センターより、『100年前のパンデミック

- ク 日本のキリスト教はスペイン風邪とどう向き合ったか』新教出版社、2021年（執筆者に情報・資料提供）
- ・千葉市立郷土博物館 外山信司氏より、『千葉史学』第78号、2021年5月号／佐倉よみうりNo.417 コピー／館山市立博物館 令和2年度企画展図録「武士たちの明治」（加茂令子関連）
- ・村岡恵理氏（1986年高等部卒）より、『アンのゆりかご』英訳本 *Anne's Cradle: The Life and Works of Hanako Muraoka, Japanese Translator of Anne of Green Gables* (Nimbus, 2021)（資料提供、制作協力）
- ・中畝治子氏（1970年高等部卒、元小学部図画工作教員）より（いずれの書籍も挿画担当）『絵っ？でみることわざ慣用語』かもがわ出版、2020年／『風船爆弾』富山房インターナショナル、2017年／『ジソウのお仕事（データ改訂版）』フェミックス、2021年
- ・河野和雄氏（元中高部音楽科教員）より、フランシス・ビー・クラップ編、中瀬古 和訳「クリスマスパジェントと三十曲のクリスマスキャロル」明和書院、1948年（ミス・ハミルトン署名入り）
- ・作間和子氏（上智大学）より、電子ジャーナル論文“Reading L. M. Montgomery's Pat Books Out of Order: Japanese Readers, Loss, and the Possibility of New Life” *Journal of L. M. Montgomery Studies* に2021年8月16日掲載（村岡花子文庫画像提供で協力）
- ・『ハーバート・ノーマン全集』全巻、岩波書店

【おもな画像データ・資料提供】

- ・Patricia Sippel本学名誉教授へ、学会発表のためミス・コートスの画像9点
- ・芹野与幸氏へ、『湖畔の声』連載記事「からし種のゆくえ」のため東洋英和ゆかりの宣教師の画像多数
- ・深沢美恵子氏へ、自著『花子とアン 村岡花子の甲府時代』に掲載のため村岡花子関連画像3点

🌸 2021年7月1日に『野尻キャンプサイト50周年記念誌』が刊行されました！

「史料室だより」No.95でも特集した「野尻キャンプサイト」は、現在の地に開かれてから2020年で50周年を迎えました。約一年の編集期間を経て刊行された本記念誌では、山あり谷ありのキャンプの歴史と現在を、野尻に深く関わる方たちの寄稿文に豊富なカラー写真を添えて紹介しています。他にも「野尻っ子」の生の声や過去の記念誌掲載の先生がたの名文、野尻用語の解説や生物図鑑、施設の変遷など、野尻を語り尽くした120ページです。多くの皆様にお読みいただきたく、ご希望の方には通信販売（2022年3月31日まで）と、中高部購買部にて販売（2021年12月13日まで）を行っております。詳しくは中高部ホームページでご確認ください。

URL : https://www.toyoeiwa.ac.jp/chu-ko/news/news_210726_1500.html



🌸 展示コーナー休業のおしらせ

「学院資料・村岡花子文庫展示コーナー」（六本木校地 本部・大学院棟1階）は、新型コロナウイルス感染症の感染予防・拡散防止のため、当面休業いたします。再開については学院ホームページ等でお知らせいたします。ご迷惑をおかけいたしますが、ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

🌸 既刊の「史料室だより」もお読みになれます

「史料室だより」は全号、学院ホームページで閲覧できます。「東洋英和 史料室だより」で検索、または下記のURLよりアクセスしてください。東洋英和の歴史が満載です。

URL : <https://www.toyoeiwa.ac.jp/archives/publications/>

🌸 資料ご寄贈のお願い

史料室では、学院の歴史や学校生活の様子を伝える資料、写真、記念品等を収集しています。お手許にあってご不要のものがございましたら、ご寄贈いただくと幸いです。また、卒業生および教員の方々の著作も収集しています。

【お問い合わせ先】 東洋英和女学院史料室 〒106-8507 東京都港区六本木5-14-40

Tel 03-3583-3166（直通） Fax 03-3583-3329 E-mail archive@toyoeiwa.ac.jp